

コロナ禍における音楽学部での声楽実技および第九合唱への模索

— オンラインと対面による声楽実技の検証報告 —

聖徳大学音楽学部演奏学科長 教授 島崎智子

聖徳大学音楽学部音楽学科 兼任講師 柏原奈穂

2020 年以降世界に蔓延した COVID-19 は変異を繰り返しながら、いまだ猛威をふるい続けているが、音楽の世界に与えた衝撃はこれまでにない経験の連続であった。今回は、音楽学部での声楽実技について、この 2 年間で振り返りオンラインと対面の 2 つの手段での模索を、個人レッスンと合唱（第九）を通して振り返る。

1 オンラインレッスン実施の模索

2020 年 4 月 7 日緊急事態宣言が 7 都道府県に発出され、5 月 6 日までの外出自粛となった。大学においては登校禁止となり、オンラインによる授業の模索が急務となった。

1-1 オンライン会議システムの選択

様々なオンライン会議システム等の中から、Teams、Zoom、Skype、Discord、Line、FaceTime、等の使用が、音楽学部オンライン対策チームの教員達によって検討された。

オンライン会議システムの特性である、会議中の自動音量調整（音量の平均化）は、音質や音量が平均化されない音を扱う実技では課題となったが、音質に関する改善は Zoom が先行し、特に双方がパソコンを使用する場合の音質設定が幅広く行えるようになったことが特徴的であった。

これに伴い、オンライン対策チームのリーダーによって、「オンラインレッスンの手引き」が学生用と教員用の 2 種作成された^{※1}。この手引きでは、使用するデバイスごとの接続方法、音質設定、設置環境等詳細な説明が行われており、音楽学部内での使用にとどまらず、その後広く音楽関係者の参考となり活用されるようになった。

1-2 オンラインの通信環境について

音楽実技レッスンに望ましいオンライン会議システムの設定は進んだが、次に問題となったのが、指導教員と学生双方の通信環境であった。

通信環境の問題として挙げられたのは、デバイスを使用する場所の通信状態、料金設定等による通信の使用制限であった。その為学生全員にアンケートを行い、使用するデバイスや Wi-Fi 環境、通信の制限などを調査した。その結果、使用状況が多様で統一したシステムを利用することは不可能であることが分かった。そこで各教員は、学生にストレスのない通信環境の希望を聞き、学生ごとに様々なオンライン会議システムの使い分けを行ったが、この通信環境も日々刻々と変化するため、当日の通信状況を見て、打ち合わせていたオンライン会議システムを他のシステムに変更する場面もあった。尚、上記オンライン

会議システムはリアルタイムでの双方向ビデオ通話の使用（同期型）であり、通信環境等の問題でリアルタイムでのやり取りが不可能な場合は、オンデマンドでの録音、録画によりレッスンを行う非同期型も活用された。

1-3 オンラインでの声楽実技の特性、その利点と問題点

オンラインでの声楽実技の主な特性としては、「無伴奏によるレッスン」「至近距離で得られる知見」の2点があげられるが、その利点と問題点について検証する。

1-3-1 無伴奏によるレッスン

対面レッスンでは、通常、学生は、指導教員やピアニストのピアノ伴奏で歌唱するが、オンライン上では、音の遅延が起きるために、同時に演奏することは困難であり、無伴奏での歌唱が必要となる。そのため、学生は歌唱部分や伴奏部分を頭の中でイメージして歌唱しなければならない。ガイドとなる音や和音、リズムがないため、自らが積極的に音楽を進め、表現の構築力も、伴奏による音楽の叙情性に頼ることなく、より自立したものが求められる。無伴奏でレッスンを受けることに不安を感じていた学生もいたが、回をこなす毎に、自然とその形態に慣れていった。しかし一方で、パルス（拍動）を一定に感じながら歌う力がない場合、ブレスに時間を多く取ってしまったり、音符や休符の長さを適当にして歌いやすくしてしまう傾向もあった。メトロノームを使用したり、録音された伴奏と共に歌唱することで、ある程度補うこともできたが、他者と共に呼吸をして演奏する経験ができないため、実践的な感覚が欠落しやすい部分もあった。（柏原）

1-3-2 至近距離で得られる知見

コロナ禍での対面レッスンでは、マスク着用による歌唱が必須となるため、学生の唇や舌の動きを確認したり、指導教員が模範の動きを示したりすることが難しくなる。オンラインではカメラに口元を近づけることもできるため、学生、指導教員共に、理解、伝達がしやすく、クリアな授業が展開できた。詩やオペラの台本を読む練習は特に有効である。また、顔の表情から、学生の理解度も判断しやすかった。

一方、画面に全身を映し出すには、カメラから離れなければならず、音声の問題が起きやすくなる。そのため、上半身や顔の表情、発音等への指導に偏りやすく、下半身部分の改善点に気がつきにくくなる傾向があった。また、オンライン上で、歌唱する側は、自分の声がどのように届いているのかわからないという不安があり、指導教員も、マイクを通した声での判断に神経を尖らすことになった。しかし、新しい試みを取り入れ、互いに模索し、歩み寄りながら進めていくレッスンは、共同作業の形となり、結果、学生の積極性を引き出し、歌唱力の向上に繋がった。（柏原）

1-3-3 オンライン実施環境の問題

通信システムとしてのオンラインの活用については、学生と教員の双方の理解が進み、使いこなせるようになった。しかし次に問題となったのが、学生側の音を出す環境の多様さであった。家族と同居の場合、家族もリモートで仕事をしていて近くで音を出すことが出来ない、大型楽器で自宅での演奏が不可能、楽器を持っていないなどの学生もあり、その対策が考えられた。

まず、住まいで音が出せない学生の場合は、感染防止対策を充分に行ったうえで、大学に来て練習をす

る、オンラインレッスンを受けるなどの対処を行った。次に楽器を持っていない学生には、可能な範囲で楽器の貸与も行われた。

2 新型コロナウイルス感染拡大防止下の対面実技実施の模索

長期化する COVID-19 の中でも、教育現場での学びを止めない為、対面による授業も模索されるようになったが、音楽の中でも特に飛沫の出る、声楽、ミュージカル、合唱等歌唱分野と管楽器類の実技レッスンの再開は困難を極めた。しかしながら、歌唱、管楽器による飛沫やエアゾルの検証が、ヤマハ、全日本合唱連盟、東京都交響楽団をはじめとして複数の団体で行われ、感染防止策が検討された。それらの検証結果から、音楽学部においては学生自身の感染防止と楽器の除菌、飛沫等の遮断の2方向から対策が考えられた。

2-1 飛沫とエアゾル対策

学生自身の感染防止については、当初から推奨されていた手指の消毒や手洗いうがいを、レッスン前後に行うことを徹底し、鍵盤楽器等の消毒に当たっては楽器の保全にも考慮した除菌液が検討された。また歌唱分野においてはマスク着用とし、布、ウレタン、歌唱用マスク、不織布などが様々に検討された。

飛沫防止としては、自立型パーティション、アクリル板、ビニールによるパーティションが組み合わせられ、レッスン室ごと種目ごとの工夫がなされた。

レッスン室の使用については、窓のある部屋のみ使用にとどめ、教室ごとの人数の上限を決め、時間を区切った換気など、音楽学部での感染拡大防止マニュアル「音楽学部新型コロナウイルス対策ガイドライン」を作成し、学生および教員に周知を行った。

また、レッスン室に携帯できる消毒セット（アルコール消毒液、鍵盤専用除菌液、拭き取り用紙）を、全レッスン室分準備し音楽事務室に設置した。

2-1-1 飛沫とエアゾル対策の問題点

マスクをしても歌唱では、十分な呼吸が保持できない、口を始めとして表情がわかりづらい、発音等の確認が明確にできない、などの問題が発生したが、学生たちは、歌唱しやすいマスクやアンダーマスクの補助具の使用等を各自模索し、自分に合うものを見つけ出していった

また、様々なパーティションでの歌唱には、閉塞感や声の反射が直接過ぎて歌唱しづらい、自らの音を聴きづらいなどの問題が生まれた。この問題は直接の解決ができないものであったが、時間割の工夫で、可能な限り広い教室やホールを使用するようにした。

3 第九合唱の取り組み

音楽学部では、ベートーヴェンの第9交響曲の合唱が、大学1年次生の春学期と秋学期の必修科目に配置されており、最終的には12月にプロオーケストラとの全曲演奏に参加する。2020年には全くの見通しがつかず、早い時点で公演を中止せざるを得なかった。その為秋学期は開講せず、春学期のみ行うこととしてオンラインでの授業が模索されることとなった。

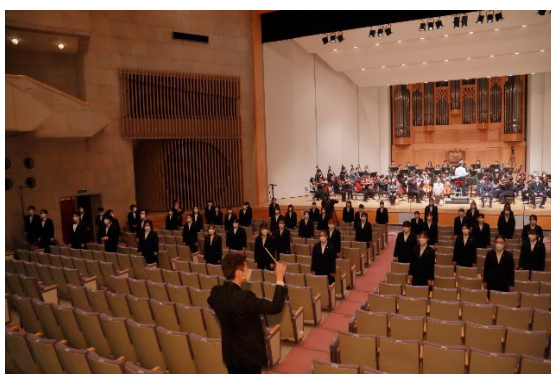
3-1 オンラインでの取り組み

合唱担当教員は、作曲家とその作品解説に始まり、発音、発声、歌唱など全てをオンラインで行えるよう研究した。ここで問題となったのが、音の遅延であった。そこで、ピアノ音源を学生に配信し、各学生がその音源をもとに歌唱することで個人での歌唱は解決された。学生個々の歌唱練習は順調に進んだが、学生たちにとって最終的な合唱の形態の想像がつかないのが実情であった。そこで担当教員は、各学生の音源を重ね合唱に加工したものを学生に聴かせることによって、本番にむけてのイメージを膨らませ、学生の興味や期待を保つ工夫を行った。

3-2 対面での取り組み

2021年春学期より対面での合唱練習が再開した。感染拡大防止の為にマスク着用、歌唱者同士の間隔の保持、一定時間ごとの換気等、神経を使う授業の連続ではあったが、秋学期へと進むことが出来、前年度に秋学期を履修しなかった2年生と共に12月の公演に向けて、その形態の模索が始まった。

本来、第九公演では合唱、オーケストラ、ソリスト、指揮者が舞台上で演奏するが、総勢150名近いこの状態は、いわゆる密にあたり、避けなくてはならない状況であった。そこで、合唱を歌う学生を、講堂1階の客席で、横2席縦1列の間隔をもって配置し、舞台上の指揮者、ソリスト、オーケストラに背を向ける形を取り、指揮者を直接見ることが出来ない合唱のためには副指揮者を立てることとした。その為、講堂1階には観客を入れず、2階のみ人数限定で入場可能とした。形態は決定したものの、反響板が無く、本来演奏する想定で設計されていない客席空間で、かつ演奏者間の距離を保たなくてはならない状況での歌唱は非常に難しく、担当教員によって最も良い音響を探すために、声部をさらに細分化した配置の模索が様々に行われた。



▲ 第九リハーサルより

3-3 第九ソリストの立場から

通常、オーケストラ、合唱を伴った作品では、ソリストは、指揮者とオーケストラの間、もしくはオーケストラと合唱の間に立ち、歌唱するが多いが、ソーシャルディスタンスをとるために、今回の演奏会では、指揮者を背に、舞台面に立つことになった。ソリスト四人の間に、飛沫防止のための高さ2メートル程のパネルを置き、それによって、至近距離で歌唱することが可能になり、リハーサルに臨んだが、互いの声がパネルで遮られ、アンサンブルが困難になった。結果、パネルを取り除き、互いに2メートルの距離を取ることで、ベストな演奏に臨むことができた。ソリストも合唱も4楽章から演奏するため、そ

れまではオーケストラの演奏を聴くことができる。今回、学生が舞台後方ではなく、客席部分で演奏する配置にしたので、4楽章前までは、ソリストと合唱が向かいあって着席していた。目が合って微笑んだり、音楽の高まりや緊張感を共有することができた。学生たちが立ち上がり、客席後方に向きを変え、高らかに歓喜の歌を歌い始めた。いつもなら、合唱のエネルギーを背に受け、その表情を見ることができないのだが、今回の配置では、学生たちの凛とした背中、第九を演奏できる喜びが全身から溢れ出る姿を見ることができた。(柏原)



▲ 第九本番

4. おわりに

COVID-19によって音楽の世界でのオンライン化が急速に進み、これまで共存できないと考えられていた分野で、様々に活用できることが見出されている。音楽学部における声楽指導でも、オンラインレッスンの利点は多く、また遠方からの学習の場の可能性も見い出せた。しかし、学生たちにとって、音が空間に満ちる中で、歌う、聴くといった体感を持つことが出来なかった期間に失われたものは大きい。学部においては、自由な音空間を経験していた3、4年次生と、大学が始まって以来経験が制約された1、2年次生では、若干の差を感じるようにも思う。本番会場で、第九合唱の初回合同練習が行われた際の、学生たちの驚き、戸惑いが、歌い進むにつれ、歌う意欲や喜びに変化する様を目の当たりにして、指導者が担うものの大きさを痛感した。一日も早い感染の収束を願いつつ、今後も音楽を学ぶ学生たちの、音に満ちた学びの場を模索したい。

※1. 菅野雅紀 2020年5月13日版「オンラインレッスンの手引き 先生用 V5.3」

https://masanorisugano.com/download/Guide_Online_Lessons_for_Teachers_v5_3.pdf

「オンラインレッスンの手引き 生徒等 V5.3」

https://masanorisugano.com/download/Guide_Online_Lessons_for_Students_v5_3.pdf

参考資料

1. 株式会社ヤマハミュージックジャパン 2020年6月「管楽器・教育楽器の飛沫可視化実験」
https://jp.yamaha.com/products/contents/winds/visualization_experiment/index.html
2. 公益財団法人東京都交響楽団 2020年6月25日「東京都交響楽団（都響）演奏会再開への工程表と指針」
<https://www.tmsso.or.jp/j/wp/wp-content/uploads/2020/06/Guidelines.pdf>
3. 一般社団法人全日本合唱連盟 2020年10月8日「合唱活動における飛沫実証実験の速報」
<https://jcanet.or.jp/news/COVID-19.htm>
4. クラシック音楽公演運営推進協議会 2020年12月11日「声楽・合唱における飛沫感染リスク検証実験」
<https://www.slideshare.net/JACMP/ss-243614588>
5. 一般社団法人全日本合唱連盟 2021年6月7日第3版
「合唱活動における新型コロナウイルス感染症拡大防止のガイドライン」
<https://jcanet.or.jp/JCAchorusguideline-ver3.pdf>